

大学運動選手の危機経験：競技レベルによる違い

Crisis Experiences in University Athletes: Differences by Competition Level

竹之内 隆 志*

奥 田 愛 子**

大 畑 美喜子***

Takashi TAKENOUCHI*

Aiko OKUDA**

Mikiko OOHATA***

The purpose of this study was to clarify the characteristics of athletes' crisis experiences and the serious crisis issues for athletes. University athletes (198 males and 184 females) completed a questionnaire assessing their experience of crisis and exploration for six issues in the athletic domain, and for seven issues in the daily life domain. The participants were categorized to three groups by competition level: higher, middle, and lower competition levels. An examination of the scores of crisis and exploration for each issue revealed that, for male athletes who play in higher competition levels, the serious crisis issues were the issues of team management and future occupation/life course; for male athletes who play in middle and lower competition levels, the serious crisis issues were the issues of future occupation/life course, life style/values, and friends of the opposite sex; for female athletes who play in higher competition levels, the serious crisis issues were the issues of coaches, athletic performance, future occupation/life course, and life style/values; for female athletes who play in middle and lower competition levels, the serious crisis issues were the issues of continuation in athletics, future occupation/life course, and life style/values. These results suggest that the serious crisis issues are different by competition level and sex.

序 論

パーソナリティの発達には多様な経験が影響しているが、そのような経験の一つとして危機経験をあげることができる。危機とは、選択決定を迫られたり、それまでに身につけた行動様式の修正を余儀なくさせられるような時に生じるものである(中込・奥田, 1993)。このような危機経験を、中込・鈴木(1985)は、危機(crisis)、探求・努力(exploration、以下、「探求」と略す)、自己投入(commitment)という3側面を含む経験として概念化している。危機とは、個人にとって意味のあるいくつかの可能性を選択しようと迷ったり悩むことである。探求とは、迷いや悩みの解決に向けて探求・努力することである。自己投入とは、自己の選択に対して関心を示したり努力することである。

このような危機経験が、運動選手のパーソナリティ発

達に影響することが明らかにされている。例えば、中込ほか(中込・鈴木, 1985; 中込・吉村, 1990; 鈴木・中込, 1985, 1986)は、運動部活動や日常生活での危機経験が、大学運動選手の自我同一性形成や自我機能の強さに関連することを明らかにしている。同様に、竹之内ほか(2006)は、運動部活動や日常生活での危機経験が、中学ならびに高校運動選手の自我発達に関連することを明らかにしている。また、杉浦(2001, 2004)やStambulova(2000)は、危機は発達における転機となり、危機によって運動選手の心理的成長が期待できると示唆している。

これらのことから危機は発達促進的な側面を有していると言える。しかしその一方で、危機は発達を阻害することもあり、危機に直面した際にうまく対処できないと問題を引き起こすとも言われている。人生で遭遇する危機を熟考した一人にエリクソン(1973a, 1973b)をあ

* 名古屋大学総合保健体育科学センター
** びわこ学院大学
*** 岐阜大学
* Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University
** Biwako Gakuin University
*** Gifu University

げることができるが、鑑(1988)は「エリクソンにおける心理社会的危機とは、ライフ・サイクルのなかで、次のプロセスに進むか、それまで経てきた発達の前段階に逆戻りするか、横道に進んでしまうかという意味の『岐路』ないし『峠』の意味で用いられている」と述べている。また、長尾・前田(1976)は「危機とは、1つの分岐点であり、自我の危機をうまく適応的にのりこえることができると、強い自我形成へむかい、一歩誤ると、神経症や精神病など、時には非行や反社会的行動などへと転落してゆくことになる」と述べている。そして、エリクソンのいう同一性と親密性の危機に直面し、その危機を乗り越えることができずに同一性障害に陥った症例を報告している。このような危機による発達の阻害は運動選手でも報告されている。中込(1993)は、指導者やチームメイトとの関係、あるいは競技継続などの運動領域での危機に対して適応的に対処できずに、青年期後期になって同一性危機を呈した運動選手の事例を紹介している。

このように危機に直面することは、パーソナリティの発達と阻害の両方の可能性を有している。そこで、危機に直面した運動選手が深刻な問題を呈することを防ぐにはどうしたらよいか、あるいは危機がパーソナリティの発達に繋がっていく条件などを明らかにすることが必要となる。本研究では前者に焦点をあてるが、危機経験がパーソナリティの発達に繋がらずに、むしろ阻害要因として問題誘発的に作用する可能性が高いのは、以下の2つの状況においてではないかと思われる。つまり、1) 危機の水準が高い場合、2) 危機に対して適応的な対処行動がとれない場合、すなわち危機の水準に比べて探求の水準が低い場合、である。そこで、運動選手が遭遇する危機事象のうちのどのような事象においてこのような状況が生じやすいのかを検討していくことがまず必要である。

また、上述の点を検討していくにあたっては、競技レベルを考慮することが必要と思われる。競技レベルが高いほど競技に関する危機の水準も高くなり、危機の水準が高い方が問題の発現も多くなると予想されるからである。ただし、鈴木・中込(1985)は、競技レベルの高い選手と低い選手では運動領域における危機経験の水準に差がみられなかったと報告している。このような結果については、調査した危機事象の問題が影響しているかもしれない。彼らは運動領域の危機事象としてチームメイトとの関係や競技成績などの事象を取り上げて検討しているが、彼らが取り上げた事象が運動領域の危機事象を網羅しているかは定かではない。また、鈴木・中込(1985)の研究は男子選手を対象になされており、得られた結果が女子にもあてはまるかは不明であ

る。

以上のことから、本研究では、代表的な危機事象を網羅するように取り上げて、男女別・競技レベル別に運動選手の危機経験の特徴を検討することにした。具体的には、危機の水準が高い事象や危機の水準に比べて探求の水準が低い事象を男女別・競技レベル別に明らかにし、運動選手において問題を誘発しやすい危機事象を同定していく。これらのことによって、危機経験による運動選手の問題生起やその予防について理解を深めることができると考えた。

方 法

1. 対象者および調査時期

11校の大学の運動選手(2年生以上)を対象者として、2010年3月から8月にかけて調査を行った^{注1)}。対象者のうち危機経験または競技レベルについて記入漏れがあった者と中学・高校のいずれにおいても運動部所属経験がない者を除き、最終的には男子198名(平均年齢20.29歳)と女子184名(平均年齢20.04歳)を分析対象者とした。分析対象者の実施種目は個人種目から集団種目まで多岐にわたり、競技経験年数の平均は男子9.62年で、女子9.03年であった。

2. 調査内容

1) 危機経験

竹之内ほか(2008)は大学運動選手の危機経験を調査し、22個の運動領域の危機事象と17個の日常生活領域の危機事象を抽出している。また、個々の危機事象の経験者の割合も報告している。これらの危機事象から、運動選手の代表的な危機事象を取り上げて調査項目に含めることにした。取り上げる基準としては、危機経験者の割合が低い事象は代表的な危機事象とは考えにくいので、経験者の割合が概ね10%であることを基準とした。この基準によって、「チームメイトとの関係」「指導者との関係」「競技成績」「競技継続」「チーム運営」「怪我」「勉強」「将来の職業や進路」「異性の友人との関係」「部外の同性の友人との関係」「父親との関係」「母親との関係」を取り上げた^{注2)}。前者6事象は運動領域での危機事象であり、後者6事象は日常生活領域での危機事象である。さらに、危機経験者は5%程度であったが「生き方や価値」も取り上げた。この事象は自我同一性形成という青年期の発達の危機に関連する事象(加藤、1983; 無藤、1979)であり、危機経験とパーソナリティの関連を扱った先行研究の多くで取り上げられているためである。結果として、運動領域として6事象、日常生活領域として7事象を取り上げたが、比較的によくの

人が危機を経験すると思われる事象を幅広く抽出したと考えられる。

対象者は、これら13事象における危機、探求、自己投入の経験を、各々「大学に入ってからこれまでの間に、個々の事象について迷ったり悩んだりしましたか」、「迷ったり悩んだときに、それを解決しようと努力しましたか」、「現在、そのことについて自分なりの信念をもって積極的に努力していますか」という質問で問われた。回答は4件法を用い、「まったくあてはまらない」を1、「非常にあてはまる」を4として得点化した。なお、自己投入については今回の研究の目的に関連しないので、分析には用いなかった。

2) 競技レベル

大学入学後に出場した最もレベルの高い大会とその大会での試合結果を尋ねた。大会については、「全国大会、地区大会、県大会、市町村大会、出場経験無し」の5つを設定し、試合結果については、「優勝～ベスト4、ベスト5～ベスト16、それ以下」の3つを設定し、各々一つ選択してもらった。

結果および考察

1. 危機の水準が高い事象

まず、競技レベルを、全国大会ベスト16以上、全国大会ベスト16未満、地区大会以下の3群に分類し、それぞれを高レベル群、中レベル群、低レベル群とした。そして、男女別に各群の13事象の危機の平均を算出し、男子の平均を図1に、女子の平均を図2に示した。さらに個々の危機事象の危機得点の大小関係を明示するために、危機得点の平均をもとに危機事象を順位づけし、男子のランキングを表1に、女子のランキングを表2に示した。なお、各群の人数は表1と表2を参照されたい。

表1と表2において順位の高い事象は危機の水準が

高く、危機による問題誘発の可能性がある事象と考えられる。危機の平均が2.5（「2：少し経験した」という水準と「3：かなり経験した」という水準の中間）以上であることを基準として、そのような可能性のある事象を調べてみると、男子（表1）では高レベル群と中レベル群で4事象、低レベル群で3事象が相当していた。どの群でも「競技成績」「職業や進路」「生き方や価値」がこの基準をクリアしており、これらは男子全般において注意が必要な危機事象と言える。これらの事象に加え

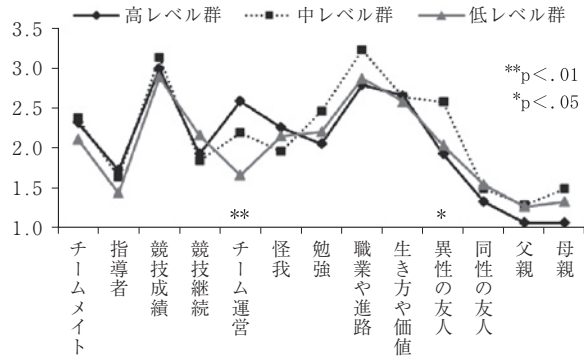


図1 男子における各事象の危機の平均

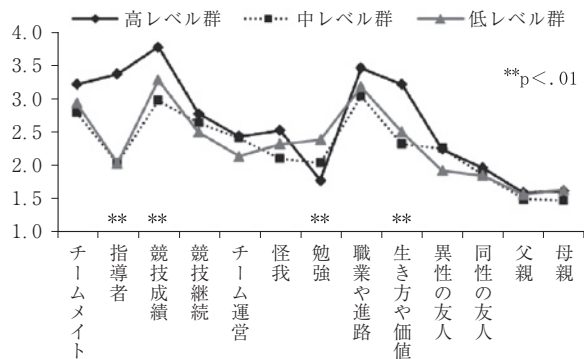


図2 女子における各事象の危機の平均

表1 男子における危機得点の平均に基づく危機事象のランキング

順位	高レベル群 (n=15)		中レベル群 (n=34)		低レベル群 (n=149)	
	危機事象	M	危機事象	M	危機事象	M
1位	競技成績	3.00	職業や進路	3.24	競技成績	2.90
2位	職業や進路	2.80	競技成績	3.15	職業や進路	2.88
3位	生き方や価値	2.67	生き方や価値	2.65	生き方や価値	2.59
4位	チーム運営	2.60	異性の友人	2.59	勉強	2.21
5位	チームメイト	2.33	勉強	2.47	競技継続	2.17
6位	怪我	2.27	チームメイト	2.38	怪我	2.15
7位	勉強	2.07	チーム運営	2.21	チームメイト	2.12
8位	競技継続	1.93	怪我	1.97	異性の友人	2.04
9位	異性の友人	1.93	競技継続	1.85	チーム運営	1.66
10位	指導者	1.73	指導者	1.65	同性の友人	1.55
11位	同性の友人	1.33	同性の友人	1.50	指導者	1.44
12位	父親	1.07	母親	1.50	母親	1.34
13位	母親	1.07	父親	1.29	父親	1.27

表2 女子における危機得点の平均に基づく危機事象のランキング

順位	高レベル群 (n=32)		中レベル群 (n=46)		低レベル群 (n=106)	
	危機事象	M	危機事象	M	危機事象	M
1位	競技成績	3.78	職業や進路	3.04	競技成績	3.28
2位	職業や進路	3.47	競技成績	2.98	職業や進路	3.19
3位	指導者	3.38	チームメイト	2.80	チームメイト	2.94
4位	チームメイト	3.22	競技継続	2.65	競技継続	2.51
5位	生き方や価値	3.22	チーム運営	2.41	生き方や価値	2.51
6位	競技継続	2.78	生き方や価値	2.33	勉強	2.39
7位	怪我	2.53	異性の友人	2.26	怪我	2.33
8位	チーム運営	2.44	怪我	2.11	チーム運営	2.14
9位	異性の友人	2.25	勉強	2.04	指導者	2.04
10位	同性の友人	1.97	指導者	2.04	異性の友人	1.93
11位	勉強	1.78	同性の友人	1.87	同性の友人	1.85
12位	母親	1.63	父親	1.50	母親	1.64
13位	父親	1.59	母親	1.48	父親	1.57

て、男子の高レベル群では「チーム運営」の危機の平均が、そして中レベル群では「異性の友人」の危機の平均が2.5以上であった。

女子(表2)においては、危機の平均が2.5以上である事象は、高レベル群で7事象、中レベル群で4事象、低レベル群で5事象みられた。どの群でも「競技成績」「チームメイト」「競技継続」「職業や進路」の危機の平均が2.5以上であり、これらは女子全般において注意が必要な危機事象と言える。これらの事象に加えて、女子の高レベル群では「指導者」「生き方や価値」「怪我」の危機の平均が、低レベル群では「生き方や価値」の危機の平均が2.5以上であった。

以上の結果の特徴的な点は、まず、男女のすべての群において、「競技成績」と「職業や進路」の危機の平均が2.5以上であった点である。大学運動選手の危機経験を検討した先行研究(中込・鈴木, 1985; 竹之内ほか, 2008)においても、これらの事象での危機の水準は高いことが示されており、本研究の結果と一致している。「競技成績」の危機の得点が高いのは運動選手であることから了解できる。「職業や進路」については、就職の問題と言ってもよいが、社会人手前の大学生では就職の問題は現実的に重要となる。また、「職業や進路」の問題は自我同一性の形成といった青年期後期に活発になる発達の危機に関連する(加藤, 1983; 無藤, 1979)。これらのことから、大学生という時期で「職業や進路」の危機の水準が高くなることはもっともと言える。

次に、特徴的な点は、危機の平均が2.5以上の運動領域の事象は中・低レベル群よりも高レベル群の方が多いという点である。男子の中・低レベル群では危機の平均が2.5以上の運動領域の事象は1つであったが、高レベル群では2つであった。また、女子の中・低レベル群では危機の平均が2.5以上の運動領域の事象は3つであったが、高レベル群では5つであった。このように、競技

レベルが高いほど運動領域の多くの事象で危機を経験すると言える。特に女子の高レベル群では、危機の平均が2.5以上の運動領域の事象が5つと他の群よりも多く、運動領域での危機経験による問題誘発の可能性の高さが窺われ、注意が必要である。

2. 競技レベルによって危機の水準に差がある事象

上述のように、運動選手の危機経験が競技レベルによって異なると指摘したが、どの事象において3群の危機の水準が異なっているのかは明確ではない。そこで、事象ごとに3群の危機得点の平均の差を分散分析によって検討した。

結果は表3ならびに図1、図2に示したが、男子では、「チーム運営」と「異性の友人」において平均の差が有意であった。有意水準を5%としたLSD法による多重比較の結果、「チーム運営」では、高レベル群・中レベル群の危機の平均が低レベル群よりも高かった。「異性の友人」では、中レベル群の危機の平均が低レベル群・高レベル群よりも高かった。

女子では、「指導者」「競技成績」「勉強」「生き方や価値」において平均の差が有意であった。有意水準を5%としたLSD法による多重比較の結果、「指導者」では高レベル群の危機の平均が中レベル群・低レベル群よりも高かった。「競技成績」では、高レベル群の危機の平均が低レベル群・中レベル群よりも高く、また、低レベル群の危機の平均が中レベル群よりも高かった。「勉強」では、低レベル群の危機の平均が中レベル群・高レベル群よりも高かった。「生き方や価値」では、高レベル群の危機の平均が低レベル群・中レベル群よりも高かった。

鈴木・中込(1985)は、男子大学選手では運動領域の危機経験の水準に競技レベルによる差はみられなかったと報告しているが、本研究では差がみられた。本研究の男子で差のみられた運動領域の事象は「チーム運営」

表3 危機得点の分散分析の結果

領域	危機事象	男子		女子	
		F 値(2,195)	多重比較	F 値(2,181)	多重比較
運動	チームメイト	1.02		1.59	
	指導者	1.40		19.46 **	高>中・低
	競技成績	0.94		8.49 **	高>低>中
	競技継続	1.16		0.70	
	チーム運営	9.30 **	高・中>低	1.50	
	怪我	0.43		1.09	
日常生活	勉強	1.17		6.11 **	低>中・高
	職業や進路	1.80		1.84	
	生き方や価値	0.06		7.26 **	高>低・中
	異性の友人	3.90 *	中>低・高	1.86	
	同性の友人	0.46		0.16	
	父親	0.75		0.11	
	母親	1.64		0.45	

* p<.05, ** p<.01

であったが、彼らはこの事象を調査内容に含めていなかった。また、鈴木・中込（1985）は女子での検討を試みていなかったが、本研究では女子についても検討し、「指導者」と「競技成績」の2つの運動領域の事象で、競技レベルによる危機水準の差が認められた。これらのことから鈴木・中込（1985）で競技レベルの差が認められなかったのは、取り上げた事象や男子のみを対象者としたことに由来すると考えられる。そして、本研究の結果より、運動選手の危機経験を検討するには競技レベルを考慮することが必要と言える。

さて、運動領域で競技レベルによる危機水準の差がみられた事象、すなわち男子の「チーム運営」、女子の「指導者」「競技成績」では、一貫して高レベル群の危機の平均が最も高かった。一方で、日常生活領域で差のみられた事象、すなわち男子の「異性の友人」、女子の「勉強」「生き方や価値」では、このような一貫した傾向は見られていない。つまり、高レベル群の危機の水準が高いのは運動領域の事象に限定されるが、高レベル群は運動に深く関わることが求められるが故に、運動領域での危機の水準が高くなるのだと考えられる。前項での結果も加味すると、競技レベルの高い選手は中・低レベルの選手よりも運動領域の多くの事象で危機を経験し、危機の水準も高いと言えるので、運動領域での危機経験の影響が強くなると考えられる。また、こうした傾向は、特に女子において顕著であることを留意しておく必要がある。

3. 危機と探求の水準に差がある事象

危機経験が問題誘発的な影響を与える可能性は、危機の水準が高い場合のみならず危機に対して対処行動が伴わない場合にも高まると思われる。つまり、危機の水準に比べて探求の水準が低い事象は、問題誘発的な

危機事象となる可能性がある。そこで、事象ごとに危機と探求の平均の差について検討することにした。

なお、こうした検討に先立って、運動領域として取り上げた6事象の危機得点を加算し、また6事象の探求得点を加算して、運動領域の危機加算得点と探求加算得点を算出した。同様に、日常生活領域として取り上げた7事象においても、日常生活領域全体の危機加算得点と探求加算得点を算出した。そして、これらの加算得点の平均を競技レベル別に算出し、平均の差を分散分析によって検討した。各群の加算得点の平均と標準偏差および分散分析の結果を表4に示した。男子では、運動領域の探求加算得点において平均の差が有意であり、有意水準を5%としたLSD法による多重比較の結果、高レベル群の探求加算得点の平均が低レベル群よりも高かった。女子では、運動領域の危機加算得点と探求加算得点において平均の差が有意であり、有意水準を5%としたLSD法による多重比較の結果、いずれにおいても高レベル群の加算得点の平均が低レベル群・中レベル群よりも高かった。このように加算得点の3つで競技レベルによる差が認められたが、平均の差は高レベル群と中レベル群または低レベル群との間に認められるだけで、中レベル群と低レベル群の平均には差が認められていない。そこで、以後の分析では中レベル群と低レベル群を一つの群に統合して分析した。

男女別・競技レベル別に個々の事象の危機と探求の平均を算出し、図3に男子の高レベル群の平均を、図4に男子の中・低レベル群の平均を示した。また、図5に女子の高レベル群の平均を示し、図6に女子の中・低レベル群の平均を示した。事象ごとに危機と探求の平均の差を対応のあるt検定（両側検定）で検討した結果、男子の高レベル群では「職業や進路」で平均の差が有意であった（ $t(14)=2.17, p<.05$ ）。男子の中・低レベル群では、

表4 危機加算得点と探求加算得点の平均と標準偏差および分散分析の結果

領域		高レベル群	中レベル群	低レベル群	F 値	多重比較
男 子						
運動	危機	13.9 (4.45)	13.2 (3.36)	12.4 (3.53)	1.50	
	探求	14.2 (4.25)	13.4 (3.57)	12.1 (3.60)	3.66 *	高>低
日常生活	危機	12.9 (3.53)	15.2 (3.53)	13.9 (4.01)	2.34	
	探求	12.0 (2.56)	14.0 (3.63)	13.0 (4.15)	1.46	
女 子						
運動	危機	18.1 (3.16)	15.0 (3.63)	15.2 (3.91)	8.40 **	高>低・中
	探求	17.7 (3.53)	14.2 (3.52)	14.3 (3.84)	11.27 **	高>低・中
日常生活	危機	15.9 (3.42)	14.5 (4.00)	15.1 (3.95)	1.20	
	探求	14.8 (4.32)	13.6 (4.22)	13.6 (3.90)	1.20	

上段：M, 下段 (SD)；*p < .05, **p < .01；男子のF値の自由度は (2,195), 女子は (2,181)

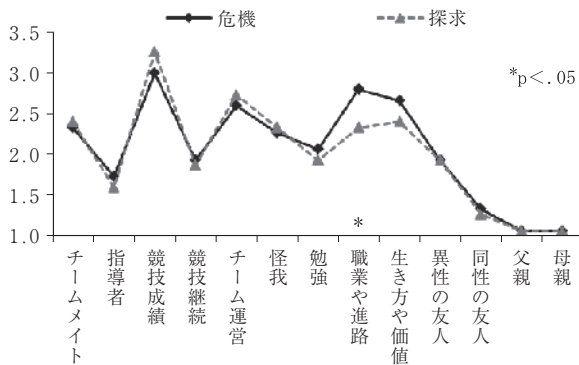


図3 男子における高レベル群の危機と探求の平均

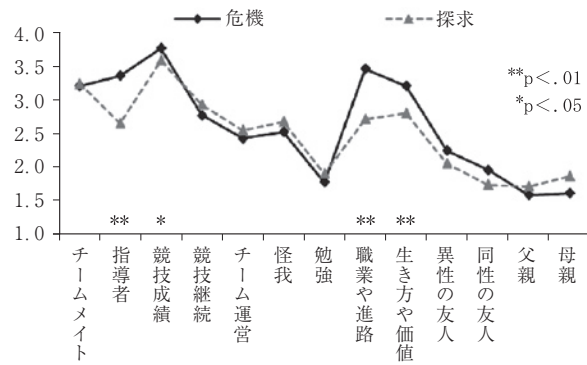


図5 女子における高レベル群の危機と探求の平均

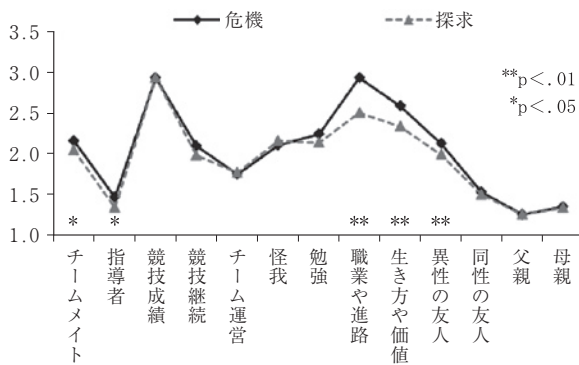


図4 男子における中・低レベル群の危機と探求の平均

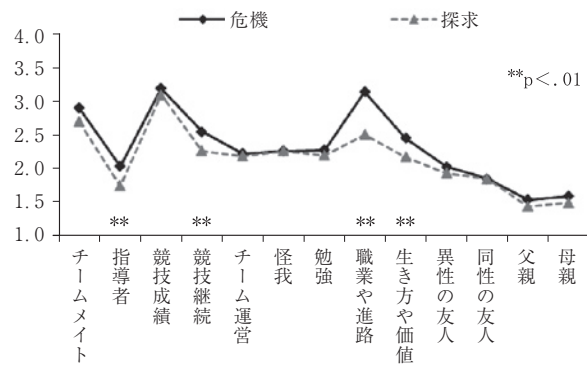


図6 女子における中・低レベル群の危機と探求の平均

「チームメイト (t(182)=2.11, p<.05)」「指導者 (t(182)=2.50, p<.05)」「職業や進路 (t(182)=6.75, p<.01)」「生き方や価値 (t(182)=4.77, p<.01)」「異性の友人 (t(182)=2.66, p<.01)」で平均の差が有意であった。女子の高レベル群では、「指導者 (t(31)=4.58, p<.01)」「競技成績 (t(31)=2.68, p<.05)」「職業や進路 (t(31)=4.82, p<.01)」「生き方や価値 (t(31)=2.88, p<.01)」で平均の差が有意であった。また、女子の中・低レベル群では、「指導者 (t(151)=4.79, p<.01)」「競技継続 (t(151)=4.36, p<.01)」「職業や進路 (t(151)=8.32, p<.01)」「生き方や価値 (t(151)=4.92, p<.01)」で平均の差が有意であった。有意であった事象のすべてにおいて、危機の水準に比べて探求の水準が低かった。

男子で危機と探求の平均に差がみられた事象は、高レベル群では1事象であったが、中・低レベル群では5事象であった。つまり、危機への対処行動が伴わずに問題を呈する可能性は、男子では高レベル群よりも中・低レベル群の方が高いと言える。他方、女子では、どちらの群でも「指導者」「職業や進路」「生き方や価値」において危機と探求の平均に差がみられ、差がみられた事象の数はどちらの群も4事象であった。つまり、危機への対処行動が伴わずに問題を呈する可能性は、女子ではどちらの群でも同じ程度であると考えられる。

なお、「指導者」「職業や進路」「生き方や価値」は、女子の両群に加えて、男子の中・低レベル群でも危機と探求の平均に差がみられていた。さらに、「職業や進路」は男子の高レベル群でも危機と探求の平均に差がみられていた。こうした本研究の結果に加えて、男子大学選手の危機経験を検討した中込・鈴木 (1985) においても、「指導者」「職業や進路」「生き方や価値」では危機の水準よりも探求の水準が低いと報告されている。これ

らのことから、「指導者」「職業や進路」「生き方や価値」は運動選手全般において、危機への対処行動が伴わずに問題を呈する可能性が高い事象と考えられる。

4. 問題誘発性の特に高い危機事象

ここでは、これまでの分析結果を男女別・競技レベル別に整理し、各群において問題誘発性が特に高いと考えられる危機事象を同定していく。表5と表6は、各々男子と女子の分析結果をまとめたものである。表中の○は以下の3つの観点の各々についてあてはまる事象を示している。つまり、1) 危機の平均が2.5以上であった事象、2) 他の群よりも危機の平均が高かった事象 (高レベル群にとっては中・低レベル群のいずれかよりも平均が高かった事象のことであり、中・低レベル群にとってはどちらかの群の平均が高レベル群よりも高かった事象のことである)、3) 危機と探求の平均に差がみられた事象、である。これらの観点は、危機の水準が高いことや対処行動が伴いにくいことを示す観点である。したがって、これらに相当する事象での危機経験は問題誘発性が高いと考えられる。そして本研究では、これらの3つのうちの2つの観点到合致する事象を特に問題誘発性の高い危機事象と考えていく。

表5より、男子の高レベル群においていずれかの観点到合致した事象は、「競技成績」「チーム運営」「職業や進路」「生き方や価値」であった。これらの事象のうち、「チーム運営」と「職業や進路」は2つの観点到合致しており、特に問題誘発的な危機事象と言える。中・低レベル群でいずれかの観点到合致した事象は、「チームメイト」「指導者」「競技成績」「職業や進路」「生き方や価値」「異性の友人」であった。これらのうち、「職業や進路」「生き方や価値」「異性の友人」は2つ以上の観点到

表5 男子の分析結果のまとめ

領域	危機事象	高レベル群			危機事象	中・低レベル群		
		危機の平均 が2.5以上	他の群より 危機の平均 が高い	危機と探求 の平均に差 がある		危機の平均 が2.5以上	他の群より 危機の平均 が高い	危機と探求 の平均に差 がある
運 動	チームメイト				チームメイト			○
	指導者				指導者			○
	競技成績	○			競技成績	○		
	競技継続				競技継続			
	チーム運営	○	○		チーム運営			
日 常 生 活	怪我				怪我			
	勉強				勉強			
	職業や進路	○		○	職業や進路	○		○
	生き方や価値	○			生き方や価値	○		○
	異性の友人				異性の友人	○	○	○
	同性の友人				同性の友人			
	父親				父親			
母親				母親				

表6 女子の分析結果のまとめ

	高レベル群			中・低レベル群		
	危機の平均 が2.5以上	他の群より 危機の平均 が高い	危機と探求 の平均に差 がある	危機の平均 が2.5以上	他の群より 危機の平均 が高い	危機と探求 の平均に差 がある
運動	チームメイト	○		チームメイト	○	
	指導者	○	○	指導者		○
	競技成績	○	○	競技成績	○	
	競技継続	○		競技継続	○	○
	チーム運営			チーム運営		
日常生活	怪我	○		怪我		
	勉強			勉強		○
	職業や進路	○		職業や進路	○	○
	生き方や価値	○	○	生き方や価値	○	○
	異性の友人			異性の友人		
	同性の友人			同性の友人		
	父親 母親			父親 母親		

合致し、特に問題を生じさせやすい危機事象と言える。

表6より、女子の高レベル群でいずれかの観点に合致した事象は、「チームメイト」「指導者」「競技成績」「競技継続」「怪我」「職業や進路」「生き方や価値」であった。これらのうち、「指導者」「競技成績」「職業や進路」「生き方や価値」は2つ以上の観点に合致しており、特に問題誘発的な危機事象と考えられる。中・低レベル群においていずれかの観点に合致した事象は、「チームメイト」「指導者」「競技成績」「競技継続」「勉強」「職業や進路」「生き方や価値」であった。これらのうち、「競技継続」「職業や進路」「生き方や価値」は2つの観点に合致し、特に問題を生じさせやすい危機事象と言える。

これらの結果より言えることは、競技レベルの高い群は、低い群よりも問題誘発性の高い運動領域の危機事象が多いということである。男子では特に問題誘発性の高いと考えられた運動領域の危機事象は、高レベル群では「チーム運営」の1事象であったが、中・低レベル群では一つもみられなかった。また、女子では特に問題誘発性の高いと考えられた運動領域の危機事象は、高レベル群では「指導者」と「競技成績」の2事象であったが、中・低レベル群では「競技継続」の1事象であった。これらのことは、競技レベルの高い選手の方が低い選手よりも運動領域の多くの事象で高い水準の危機を経験したり、危機の水準に見合う対処行動を起こせないでいたりすることを示唆している。このように競技レベルの高い選手は運動領域での危機経験によって問題を生じさせる可能性が高く、注意が必要である。

特に注意を要する点は、女子の高レベル群で「競技成績」が問題誘発性の高い危機事象として同定された点である。「競技成績」については、男女のどの競技レベル群においても危機の平均が2.5以上であったが、女子

の高レベル群以外では問題誘発性の高い事象として同定されなかった。つまり、「競技成績」の危機の水準は高いが、それに見合う水準の対処行動がとられるのが一般的と考えられる。そして例外的に、女子の高レベル群は、危機の水準に見合う対処行動がとれていないと考えられる。この原因は探求の水準が低いのではなく、危機の水準が高すぎるためと思われる。女子の高レベル群の危機の平均は3.78であり、表1ならびに表2に示されたすべての群のすべての事象の中で最も危機の平均が高かった。運動選手である限り競技成績についてはかなりの努力がなされるが、女子の高レベル群ではそのような努力をしのぐ危機を経験していると考えられ、特に注意が必要である。

次に、日常生活領域の事象については、特に問題誘発性の高い事象と考えられた事象は、男子の高レベル群では「職業や進路」の1事象であったが、中・低レベル群では「職業や進路」「生き方や価値」「異性の友人」の3事象であった。女子では、高レベル群においても低レベル群においても「職業や進路」と「生き方や価値」が特に問題誘発的な事象と考えられた。これらの事象は、青年期に一般的に危機として経験される事象である。つまり、「職業や進路」「生き方や価値」の問題は、青年期の発達の危機である同一性形成に関わる事象（加藤、1983；無藤、1979）であり、さらに「異性の友人」の問題は、エリクソン（1973b、1977）が同一性形成の次の発達の危機とした親密性課題に関連する問題である。つまり、本研究の結果は、運動選手といえども、こうした一般的な発達の危機に直面していることを示している。そして、このような傾向は、男子の中・低レベル群で強いと言える。中・低レベル群の選手は競技への専心性がさほど高くなく、そのため一般の青年と同じような傾向

になるのだと考えられる。

さて、本研究では問題誘発性の高い危機事象の存在が示されたが、このことは運動選手に対する心理的サポートの必要性を示唆している。近年、運動選手に対する心理的サポートが行われるようになってきているが、その内容は競技力の向上を意図したものが多くに思われる。しかし、運動選手にとって問題誘発性の高い危機事象は運動領域と日常生活領域の両方に存在していた。そこで、競技力といった視点だけでなく、選手の日常生活も視野に入れた心理的サポートが必要と考えられる。また、問題誘発性の高い危機事象は競技レベルや男女で異なっていたので、こうした点を考慮した心理的サポートが必要と言える。

まとめ

本研究の目的は、男女別・競技レベル別に危機経験の特徴を検討し、運動選手において問題を誘発しやすい危機事象を同定することであった。2年生以上の大学運動選手を対象者として13事象での危機経験を調査し分析した結果、以下のような結果が得られた。

1) 競技レベルを高・中・低の3群に分類し、危機の平均が2.5以上の事象を調べた結果、男子ではどの群でも「競技成績」「職業や進路」「生き方や価値」が相当した。加えて、男子の高レベル群では「チーム運営」が、そして中レベル群では「異性の友人」が相当した。女子では、どの群でも「競技成績」「チームメイト」「競技継続」「職業や進路」が相当した。さらに、女子の高レベル群では「指導者」「生き方や価値」「怪我」が、低レベル群では「生き方や価値」が相当した。「競技成績」と「職業や進路」は男女のすべての群で危機の平均が2.5以上であった。また、危機の平均が2.5以上の運動領域の事象は中・低レベル群よりも高レベル群の方が多く、特に女子においてこの傾向が顕著であった。

2) 高・中・低レベル群の危機の平均を比較した結果、男子では、「チーム運営」と「異性の友人」において差がみられ、女子では、「指導者」「競技成績」「勉強」「生き方や価値」において差がみられた。運動領域の事象、すなわち男子の「チーム運営」、女子の「指導者」「競技成績」では、一貫して高レベル群の危機の平均が最も高かった。

3) 危機の水準に比べて探求の水準が低い事象は、男子の高レベル群では「職業や進路」であり、中・低レベル群では「チームメイト」「指導者」「職業や進路」「生き方や価値」「異性の友人」であった。女子の高レベル群では「指導者」「競技成績」「職業や進路」「生き方や価値」であり、中・低レベル群では「指導者」「競技継

続」「職業や進路」「生き方や価値」であった。「指導者」「職業や進路」「生き方や価値」は運動選手全般において、危機への対処行動が伴わずに問題を呈する可能性が高い事象と考えられた。

4) 以上の3つの分析のうち2つの分析で相当した事象を特に問題誘発性の高い危機事象と考えて、そのような事象を調べた結果、男子の高レベル群では「チーム運営」と「職業や進路」が相当し、中・低レベル群では「職業や進路」「生き方や価値」「異性の友人」が相当した。女子の高レベル群では「指導者」「競技成績」「職業や進路」「生き方や価値」が相当し、中・低レベル群では「競技継続」「職業や進路」「生き方や価値」が相当した。競技レベルの高い群は、低い群よりも問題誘発性の高い運動領域の危機事象が多かった。

要するに、問題誘発性の高い危機事象は競技レベルで異なり、競技レベルの高い選手は運動領域の多くの事象で危機を経験し、危機の水準も高かった。また、問題誘発性の高い危機事象は運動領域と日常生活領域の両方に存在し、男女でも異なっていた。こうした点を考慮しながら運動選手に対する心理的サポートを行う必要性が示唆された。

付 記

本研究は、文部科学省科学研究費補助金(22500572)の交付を受けて行われた。

注

注1) 3月に調査を実施した大学では、1年生を調査対象者に含めている。彼らは調査時点では1年生であったが、数日後に2年生に進級する者たちであり、4月以降に調査した大学の2年生と同じ程度の大学での危機経験を有すると判断したためである。

注2) 列挙した危機事象には、竹之内ほか(2008)で示されている危機事象と名称が異なっているものがある。例えば、本研究の「競技成績」は、竹之内ほか(2008)では、「技術の停滞・プレーの不調」と「試合に勝てない・試合で結果が残せない」というように独立して抽出されていたものを内容の類似性を考慮して、一つのカテゴリーとして取り上げたものである。また、竹之内ほか(2008)では「恋愛」となっていたものを幅広く捉えて、本研究では「異性の友人との関係」として取り上げている。さらに竹之内ほか(2008)では「家族・家庭」として抽出されていたものを、内容を明確にするために、本研究では「父親との関係」と「母親との関係」の2つに分けて取り上げている。

文献

- エリクソン：岩瀬庸理訳（1973a）アイデンティティ：青年と危機。金沢文庫：東京。
- エリクソン：小此木啓吾訳（1973b）自我同一性：アイデンティティとライフサイクル。誠信書房：東京。
- エリクソン：仁科弥生訳（1977）幼児期と社会1。みすず書房：東京。
- 加藤 厚（1983）大学生における同一性の諸相とその構造。教育心理学研究, 31：292-302。
- 無藤清子（1979）「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性。教育心理学研究, 27：178-187。
- 長尾 博・前田重治（1976）同一性障害の分類の試みとその臨床的意義について。九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）, 21（1）：15-24。
- 中込四郎（1993）危機と人格形成：スポーツ競技者の同一性形成。道と書院：東京。
- 中込四郎・奥田愛子（1993）スポーツ場面の危機様態と自我同一性形成における対処行動パターンの類似性。体育学研究, 38：175-185。
- 中込四郎・鈴木 壮（1985）運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験（Ⅰ）：Eriksonの相互性からみたスポーツ経験の特徴。体育学研究, 30：249-260。
- 中込四郎・吉村 功（1990）過去の危機様態における相互性の程度と自我機能：ロールシャッハ反応に投影された自我の強さ。筑波大学体育科学系紀要, 13：47-56。
- Stambulova, N.B. (2000) Athlete's crises: A developmental perspective. *International Journal of Sport Psychology*, 31:584-601.
- 杉浦 健（2001）スポーツ選手としての心理的成熟理論についての実証的研究。体育学研究, 46：337-351。
- 杉浦 健（2004）転機の経験を通じたスポーツ選手の心理的成長プロセスについてのナラティブ研究。スポーツ心理学研究, 31（1）：23-34。
- 鈴木 壮・中込四郎（1985）運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験（Ⅱ）：競技レベルの低い選手と高い選手の比較。岐阜大学教育学部研究報告（自然科学）, 9：89-98。
- 鈴木 壮・中込四郎（1986）運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験（Ⅲ）：性差の検討。岐阜大学教育学部研究報告（自然科学）, 10：61-71。
- 竹之内隆志・奥田愛子・大畑美喜子（2008）大学運動選手の危機事象。総合保健体育科学, 31：13-19。
- 竹之内隆志・田口多恵・奥田愛子（2006）中学ならびに高校運動選手のパーソナリティ発達：自我発達を指標とした検討。体育学研究, 51：757-771。
- 鎌 幹八郎（1988）青年の同一性（アイデンティティ）。西平直喜・久世敏雄編 青年心理学ハンドブック。福村出版：東京, pp. 257-279。